

(書式1)【候補者用】

① 立候補者の 姓名と所属	蒲生昌志 国立研究開発法人産業技術総合研究所
② 立候補の理由と 抱負 (400 字程度)	<p>「リスク」という言葉が一般的になり、様々な専門分野でそれぞれのリスク事象が扱われるようになってきました。皆さんの活躍の場も、そういったそれぞれの専門分野に見出すことができるだろうと思います。一方で、「リスク学」の独自の価値は何かと問われると、だんだん希薄になってきているような印象はないでしょうか。</p> <p>私は、「リスク学」が独自に持つ価値（各専門分野とは異なる価値）は、社会が新しいリスクに直面した時に、断片的で不確実な情報を束ね、リスクへの対処を誤らない道筋を描くことにあるのではないかと考えています。しかし、そういった行為は、しばしば、個人的な発信（ブログ等）という位置付けだったり、研究成果（論文等）として結実するのに数年を要したりしています。</p> <p>私が役員に選出されましたら、学会として「道筋を描く」行為にどう価値を見出すか、そのために満たすべき要件は何か、適切な発信はどうあるべきか、何らかの仕組みができないかなど、皆さんと一緒に考えたいと思っています。</p>
③ 本学会における 活動歴	<p>【学会賞】 1996 年度 学会論文賞</p> <p>【学会誌】 岡、蒲生、中西（1997）Risk/Benefit Analysis of the Prohibition of Chlordane in Japan: An Estimate Based on Risk Assessment Integrating the Cancer Risk and Non-cancer Risk、日本リスク研究学会誌 8(2):174-186 蒲生（2010）社会の意思決定を支えるリスク評価へ、日本リスク研究学会誌 20(3):189-195</p> <p>【年次大会・シンポジウム】 蒲生（2010）「意志決定の社会ニーズに応えるリスク評価へ」第 23 回シンポジウム、東京 蒲生（2016）「環境化学物質のリスク管理から見たものさし」第 29 回年次大会、大分</p>
④ 研究歴・職歴等 (100 字以内)	1996 年 工業技術院資源環境技術総合研究所入所。2001 年 独法化により産業技術総合研究所、現在に至る（安全科学研究部門 総括研究主幹）。NEDO や経産省のプロジェクトにおいて、化学物質やナノ材料のリスク評価・リスク評価手法の開発に従事してきた。

(書式2)【推薦者用】

① 推薦する候補者名	蒲生昌志
② 推薦者の姓名と所属	岸本充生 大阪大学データビリティフロンティア機構
③ 推薦理由 (400字程度)	<p>本氏は東京大学での大学院時代から、工業技術院を経て産業技術総合研究所に至るまで一貫してリスク評価の研究を行っている。大学院のときに行った、シロアリ防除剤の代替のリスクトレードオフ評価は、当時、方法論さえなかった、発がんとは非発がんという異なる種類のリスクの大きさを比較する方法を開発したもので、その後の様々なリスクトレードオフ評価の先駆けとなった。異なる種類のリスクトレードオフは、東日本大震災においても、新型コロナウイルス感染症においても、リスク問題に伴い必ず現れる課題である。近年では、工業ナノ材料のリスク評価に従事し、科学的知見が少ない段階から、政策に役に立つリスク評価を戦略的に実施していくという、広く新規科学技術全般に通じる課題にも取り組んできた。現在、産総研を率いて海洋プラスチック汚染課題の包括的リスク評価研究を進めつつある。Society for Risk Analysis (SRA)の年次大会においても参加・発表の回数は会員のうちでもトップクラスであり、リスク学の世界の動向についても詳しい蒲生昌志氏に、理事として、日本リスク学会にアカデミックな知見をインプットし、リスク学の発展をリードしてもらうために推薦する。</p>